第７課　七つのラッパ

【暗唱聖句】

「第七の天使がラッパを吹くとき、神の秘められた計画が成就する。それは、神が御自分の僕である預言者たちに良い知らせとして告げられたとおりである。」黙示録10：7

【日曜日・聖なる者たちの祈り】

「小羊が第七の封印を開いたとき、天は半時間ほど沈黙に包まれた」黙示録8:1

「小羊が第七の封印を開いたとき、天は半時間ほど沈黙に包まれた」と黙示録の８章は始まります。まさに嵐の前の静けさです。半時間ですからかなりの時間、天は沈黙に包まれました。次に何かがくるという沈黙。沈黙には意味があります。私たちは深く物事を考えるときに沈黙します。同じように、天は沈黙の中で、神様が次にしようとしていることをじっと待ちました。

「わたしは七人の天使が神の御前に立っているのを見た。彼らには七つのラッパが与えられた」黙示録8:2

ヨハネは七人のみ使いが神の前に立ち、彼らにラッパが与えられるのを見ます。このラッパは何を表しているのでしょうか。

「あなたがたはシオンでラッパを吹け。わが聖なる山で警報を吹きならせ。国の民はみな、ふるいわななけ。主の日が来るからである。それは近い」ヨエル2:1（口語訳）

ヨエル書を見るとラッパは警報の音。主の日がくる。大いなる裁きのときがくることの警告でした。黙示録８章において、七人のみ使い一人ひとりに一つずつラッパを与えられます。そして、裁きの日が来ることを告げる警報のラッパが吹き鳴らそうとしているのです。また、かつて祭司たちは、1日の神殿での働きを終えるとき、その日の当番の祭司が金の香炉を幕屋から取り出し、敷石の上に投げつけると、それに合わせて7人の祭司がラッパを吹き鳴らして神殿の奉仕が終わったことを告げ知らせました。これら一連の行為は、実は世界に終わりに際して天の聖所で行われることを予型していたことがわかります。8章3節になると、７人のみ使いたちがラッパを吹き鳴らす前に、別の御使いが登場し重要な役割を果たすのをヨハネは見ます。

「また、別の天使が来て、手に金の香炉を持って祭壇のそばに立つと、この天使に多くの香が渡された。すべての聖なる者たちの祈りに添えて、玉座の前にある金の祭壇に献げるためである。8:4 香の煙は、天使の手から、聖なる者たちの祈りと共に神の御前へ立ち上った。8:5 それから、天使が香炉を取り、それに祭壇の火を満たして地上へ投げつけると、雷、さまざまな音、稲妻、地震が起こった」黙示録8:3～5

この別の天使は手に金の香炉を持っています。この香は５章８節にも出てくるように「生徒たちの祈り」です。興味深いのは、この祈りの香にさらに多くの香が加えられ玉座の前にある金の祭壇に献げられることです。この加えられた香は、キリストによるとりなしの祈りではないかと言われています。つまり、私たちの祈りとキリストのとりなしが一つとなって、神様のもとに捧げられるのです。すべてのことにおいて、神の御業は私たちの祈りと深く関わってなされていくということです。神様は自分の思いを強引に推し進めていくのではなく、必ず背後にクリスチャンの祈りがあるということです。そして、祭司がしたように「天使が香炉を取り、それに祭壇の火を満たして地上へ投げつけ」ます。すると、雷や様々な音、稲妻、地震が起こります。火は焼き尽くすものです。何を焼き尽くすのかと言いますと、当然それは罪を焼き尽くすのです。さばきの火です。ただ、ラッパはさばきそのものではなくさばきの警告、世界が最終局面に入ったことの警報です。まだ、その後に続くものがあるのです。またこのラッパはすべての時代において吹き鳴らされ、常に備えることの重要性を教えています。

【月曜日・ラッパの意味】

「8:7 第一の天使がラッパを吹いた。すると、血の混じった雹と火とが生じ、地上に投げ入れられた。地上の三分の一が焼け、木々の三分の一が焼け、すべての青草も焼けてしまった。8:8 第二の天使がラッパを吹いた。すると、火で燃えている大きな山のようなものが、海に投げ入れられた。海の三分の一が血に変わり、8:9 また、被造物で海に住む生き物の三分の一は死に、船という船の三分の一が壊された。8:10 第三の天使がラッパを吹いた。すると、松明のように燃えている大きな星が、天から落ちて来て、川という川の三分の一と、その水源の上に落ちた。8:11 この星の名は「苦よもぎ」といい、水の三分の一が苦よもぎのように苦くなって、そのために多くの人が死んだ。8:12 第四の天使がラッパを吹いた。すると、太陽の三分の一、月の三分の一、星という星の三分の一が損なわれたので、それぞれ三分の一が暗くなって、昼はその光の三分の一を失い、夜も同じようになった」黙示録8：7～12

３分の１という言葉がたくさん出てきます。これは、すべてではないという意味です。ちなみに七つの封印が解かれていったときは、４分の１が災いに巻き込まれたと書かれてありました。ですから、災いが及ぶ範囲が広くなってきているのですが、それでもまだすべてではない。このことは、まず押さえておく必要があります。

　最初の2つのラッパは火山の噴火を連想させますが、この黙示録が書かれる10年ほど前に、ポンペイの大噴火があり、その記憶が残っていたことでしょう。3つ目のラッパは隕石の落下を連想させ、4つ目のラッパは天体の異常現象です。つまりこれらはすべて自然と関係した災害です。歴史主義的な解釈では、初代教会を迫害した人々やローマ帝国への神様の裁きを現わしていると考えます。第一と第二のラッパはゲルマン民族が陸路から，そして海路から侵入してきました。第三のラッパはフン族の侵入、大きな星はフン族の王アッティラ、そして第四のラッパは西ローマ帝国の滅亡ととります。

また、３つ目のラッパが吹き鳴らされた際に、「水の三分の一が苦よもぎのように苦くなって、そのために多くの人が死んだ」とありますが、エレミヤ書 23：15に「それゆえ、万軍の主は、預言者たちについて、こう仰せられる。「見よ。わたしは彼らに、苦よもぎを食べさせ、毒の水を飲ませる。汚れがエルサレムの預言者たちから出て、この全土に広がったからだ。」” と書かれてあります。これはキリスト教徒への迫害がストップした後、宗教的指導者たちが人々を誤った方向へ導き、それゆえ永遠の命からそれていくということを預言しているとも考えられます。終わり時代、ますます聖書に精通し、何が正しいのか自分で判断しなければなりません。第四のラッパが吹かれ、暗くなる、光が届かなくなるというのも、世の中の人々は光を見失い、暗闇をさ迷うような状態になっているということ現わしているとも考えられます。

「第五の天使がラッパを吹いた。すると、一つの星が天から地上へ落ちて来るのが見えた。この星に、底なしの淵に通じる穴を開く鍵が与えられ、それが底なしの淵の穴を開くと…いなごの群れが地上へ出て来た。このいなごには、地に住むさそりが持っているような力が与えられ、額に神の刻印を押されていない人には害を加えてもよい、と言い渡された」黙示録9：1～4

「第六の天使がラッパを吹いた。すると…四人の天使は、人間の三分の一を殺すために解き放された。この天使たちは、その年、その月、その日、その時間のために用意されていたのである。」黙示録9：13～15

第5のラッパが吹き鳴らされると、天から星が落ちてきて、底なしの淵に通じる穴の鍵を開きます。底なしの淵とは悪霊が閉じ込められている場所です。

「そして悪霊どもは、底なしの淵へ行けという命令を自分たちに出さないようにと、イエスに願った。」ルカ8:31

底なしの淵の鍵を開くと、サソリのような力を持ったいなごが出てきて人々を襲います。「いなごは、底なしの淵の使いを王としていただいている。その名は、ヘブライ語でアバドンといい、ギリシア語の名はアポリオンという」（黙示録9：11）とありますが、このアバドン・アポリオンという言葉は破壊という意味の言葉です。第五のラッパが吹き鳴らされたときに起こる災いは悪魔的な力を象徴しています。ただし、被害を受けるのは額に神の刻印を押されていない者たちだけです。

　第六のラッパが吹かれると災いを留めていた天使が解き放たれます。「この天使たちは、その年、その月、その日、その時間のために用意されていたのである」とあるように、神さまの時は偶然ではなく、すべて予め決まっているのです。そして「2億の騎兵隊」が3分の1の人間を殺すとありますが、2億人の騎兵隊とは悪霊の大群を象徴していると考えられます。歴史主義的には第五のラッパは東ローマ帝国に対するイスラム教徒によるさばき、「1つの星」とはマホメット、「底なしの淵」とはアラビア砂漠を指すと解釈します。また第六のラッパはオスマントルコを指すと解釈します。

これら数々の災いは、出エジプトを連想させます。「いなご」「水が血の色に変わり、苦くなる」「太陽が暗くなる」、最後の死も、出エジプトのときの災いと同じようです。そして、そのとき、王パロは最後まで心をかたくなにしましたように、世の終わりに生きている人々も悔い改めようとしません。

「これらの災いに遭っても殺されずに残った人間は、自分の手で造ったものについて悔い改めず、なおも、悪霊どもや、金、銀、銅、石、木それぞれで造った偶像を礼拝することをやめなかった。このような偶像は、見ることも、聞くことも、歩くこともできないものである。また彼らは人を殺すこと、まじない、みだらな行い、盗みを悔い改めなかった」黙示録9:20、21

災いがいっきに押し寄せないのは、一つ一つを通し、神様に立ち返るチャンスを与えるためでした。私たちは、この罪が支配する世に未練を残してはなりません。神はそこを出よと言われます。天のカナン目指して、出エジプトをせよと言われるのです。

【火曜日・開いた巻物を持った天使】

10:1 「わたしはまた、もう一人の力強い天使が、雲を身にまとい、天から降って来るのを見た。頭には虹をいただき、顔は太陽のようで、足は火の柱のようであり、 10:2 手には開いた小さな巻物を持っていた。そして、右足で海を、左足で地を踏まえて、10:3 獅子がほえるような大声で叫んだ。天使が叫んだとき、七つの雷がそれぞれの声で語った。10:4 七つの雷が語ったとき、わたしは書き留めようとした。すると、天から声があって、「七つの雷が語ったことは秘めておけ。それを書き留めてはいけない」と言うのが聞こえた」黙示録10：1～4

ヨハネはもう一人の天使が天から降ってくるのを見ます。その天使は力強く、雲に包まれ、頭の上には虹が輝き、顔は太陽のよう、足は火の柱のようであったと書かれてあります。このような描写から想像するのは、イエス・キリストです。手には開いた小さな巻物を持っています。7つの封印がされた巻物をイエス・キリストは開かれました。その巻物をあるいは小さな巻物とあるのでその一部を手にしているのでしょう。SDAは具体的にそれはダニエル書であると解釈します。後から出てくる、口に甘く腹に苦かったということを、あのダニエル書の預言解釈から始まった一連の再臨運動と大失望の経験に関連させて考えるわけです。

　この力強い天使は右足で海を左足で地を踏まえて大声で叫びます。これはそれが全世界的なメッセージであることを示しています。しかし、天から声がして「七つの雷が語ったことは秘めておけ。それを書き留めてはいけない」と言うのです。これまで、すべて書き記すように言われていたのに、この七つのメッセージは書きとめるなというのです。ヨハネは聞くことが許されたのですが、私たちには許されていないことがあったということです。それは何のことなのかは誰にもわかりません。イエス・キリストの再臨の時かもしれません。

「もはや時がない。第七の天使がラッパを吹くとき、神の秘められた計画が成就する。それは、神が御自分の僕である預言者たちに良い知らせとして告げられたとおりである」黙示録10:6、7

「もう時はない」と言います。では、それは何の時か。もちろん、最後の裁きのときです。裁きのときですが、同時にそれは、私たちにとっては良い知らせです。1260年（538年～1798年）という獣に許された時、またダニエル書8：14の「2300の夕と朝」の預言は終わるということ、その後再臨までに残された時間は短く、新たな時の預言はないということを現わしていると思われます。

【水曜日・巻物を食べる】

「わたしは、その小さな巻物を天使の手から受け取って、食べてしまった。それは、口には蜜のように甘かったが、食べると、わたしの腹は苦くなった。すると、わたしにこう語りかける声が聞こえた。「あなたは、多くの民族、国民、言葉の違う民、また、王たちについて、再び預言しなければならない。」黙示録10:10、11

巻物を食べるとは、自分のものとする、完全に理解することを象徴しています。それは、良き知らせですから、当然口には蜜のように甘いものでした。詩篇にもこんな聖句があります。「あなたの仰せを味わえば、わたしの口に蜜よりも甘いことでしょう」（詩篇110：103）。しかし、天使はヨハネにこう告げます。「口には蜜のように甘いが、あなたの腹には苦い」と。この経験はセブンスデーアドベンチストの始まりともなるミラーの再臨運動と大失望の経験を預言していると言われています。しかし、この甘くて苦い経験は、それだけではないでしょう。世の終わりの隠されていた神の計画がしだいに明らかにされていくということは、心躍るようなことであり、私たちの口には甘いものです。しかし、そのベールが開かれ、明らかにされた神のご計画を、世の人々に伝えるという働きに召されたとき、単にそれは甘いだけではなくなるのです。ヨハネは「あなたは、多くの民族、国民、言葉の違う民、また、王たちについて、再び預言しなければならない。」と告げられました。これは黙示録のメッセージが開かれたすべての教会に対しても言われているのです。このメッセージには当然神の裁きや警告を含むのですから、それを世の人々に宣言していったとき、人々はどう反応するか。当然、多くの困難が伴うものとなります。イエス様が苦い杯を飲んだように、私たちもそれを飲むこともあるということです。

「それからわたしは杖のような物差しを与えられてこう告げられた。「立って神の神殿と祭壇とを測り、また、そこで礼拝している者たちを数えよ。しかし、神殿の外の庭はそのままにしておけ。測ってはいけない。そこは異邦人に与えられたからである。彼らは四十二か月の間、この聖なる都を踏みにじるであろう」黙示録11：12

「測るとか、数える」という言葉が出てきます。神は正確な方です。救いは適当ではなくきちんと数えられていることを教えています。そして、ゼカリア２：５～９を見ると、神の保護という意味があることがわかります。

「わたしが目を留めて見ると、ひとりの人が測り縄を手にしているではないか。「あなたはどこに行かれるのですか」と尋ねると、彼はわたしに、「エルサレムを測り、その幅と長さを調べるためです」と答えた。2:7 わたしに語りかけた御使いが出て行くと、別の御使いが出て来て迎え、彼に言った。「あの若者のもとに走り寄って告げよ。エルサレムは人と家畜に溢れ、城壁のない開かれた所となる。わたし自身が町を囲む火の城壁となると主は言われる。わたしはその中にあって栄光となる」ゼカリア2章5節～9節

このようにゼカリア書にも測るという言葉が出てきます。エルサレムの町を測るのです。町の中には当然、神の民がいます。御使いは言います。「わたし自身が町を囲む火の城壁となる」と。城壁となって民を守るために、正確な距離を測ったのです。一部でも隙間があれば、そこから敵は侵入してしまうからです。もちろん、これは霊的な象徴ですが、言おうとしていることは、必ず守るということです。守るために、測る。終末の世において、神は神の子たちを測り、守られるということです。そして、どんな人たちを守るのかと言うと、神の神殿、すなわち教会でそこで礼拝している者たちなのです。

　それに対して、「神殿の外の庭はそのままにしておけ。測ってはいけない。そこは異邦人に与えられたからである」という言葉が続きます。異邦人とは、神を信じない人々のことですが、彼らは、神の保護の外に置かれるということです。

【木曜日・2人の証人】

「わたしは、自分の二人の証人に粗布をまとわせ、千二百六十日の間、預言させよう。」この二人の証人とは、地上の主の御前に立つ二本のオリーブの木、また二つの燭台である」黙示録11:3、4

このサタンが猛威をふるうような時に、二人の証人が粗布を身にまとい、神の言葉を携えて出て行きます。この二人とは誰なのかというと、「地上の主の御前に立つ二本のオリーブの木、また二つの燭台」であると言います。様々な説がありますが、たとえば黙示録：1:20に「あなたは、わたしの右の手に七つの星と、七つの金の燭台とを見たが、それらの秘められた意味はこうだ。七つの星は七つの教会の天使たち、七つの燭台は七つの教会である」とあるように、燭台は教会の象徴です。オリーブの木はこの燭台である教会を世の光として燃やし続けるためのオリーブ油、すなわち聖霊のことであり、二人の証人とは、御霊の力によって神のみ言葉を携え出て行く教会、つまりクリスチャン一人ひとりを象徴しているということになります。では、なぜ二人なのでしょう。ホワイト婦人は、「二人の証人とは旧約聖書と新約聖書のことである」と解説しています。６節をみてみると、「彼らには、預言をしている間ずっと雨が降らないように天を閉じる力がある。また、水を血に変える力があって、望みのままに何度でも、あらゆる災いを地に及ぼすことができる」とあります。雨が降らないように天を閉じる力とは、３年半雨を降らせなかった預言者エリヤを想起させ、「水を血に変える力、あらゆる災いを地に及ぼすことができるとは、モーセを想起させます。エリヤは預言者の象徴であり、モーセは律法の象徴であると考えると、聖書のことを「律法と預言者」と言いますので、ここからもこの2人の証人は聖書の御言葉を深く関わっていると言えるでしょう。あるいは、エリヤやモーセのような精神をもって主の働きをなす教会のクリスチャンたちのことを指しているのかもしれません。また、彼らは粗布を身にまとっていますが、それは通常喪服を現わします。つまり、御言葉の真理が葬られているような時代を象徴しているのかもしれません。ところが、ショッキングなことに、この二人の証人は殺されてしまうのです。

「二人がその証しを終えると、一匹の獣が、底なしの淵から上って来て彼らと戦って勝ち、二人を殺してしまう」黙示録11:7

結局、殺されてしまうのかと思ってしまいます。しかし、見落としてはならない重要なポイントがあります。それは、二人がその証しを終えると、という言葉です。逆に言えば、私たちは神の子としての使命があって、それを果たすまでは死なないということです。先の４２ヶ月や１２６０日を、中世の暗黒時代に当てはめるなら、この殉教者たちは、このような宗教改革者たちのことかもしれません。しかし、聖書はこう続くのです。11節の「 三日半たって、命の息が神から出て、この二人に入った。彼らが立ち上がると、これを見た人々は大いに恐れた。」

この宗教改革者たちの血が種となって、世界に１０億以上のプロテスタントたちがいる。このことが復活に象徴されていると言えるのではないでしょうか。